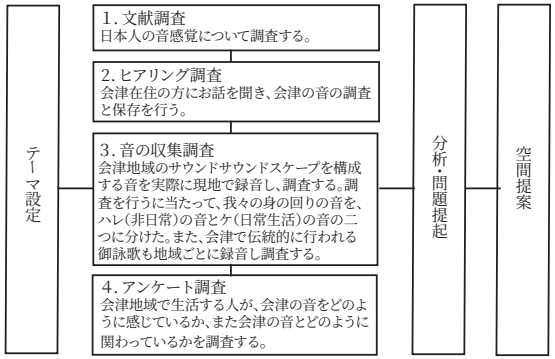
まちの調律 - 会津におけるサウンドスケープ調査研究とデザイン -

a2200501　　荒川景子

□ 背景目的

「サウンドスケープ」はカナダの作曲家マリーシェーファーが提唱した概念である。日本語では「音の風景」と訳され、我々の身の回りの音を風景として、身近に、意識的に捉えてみようと言うものである。彼は、その街のランドマークとなるような音（標識音と定義）を保存すると共に、未来へ向けた刺激的で、魅力的な音環境の創造を提案した。音楽家からのサウンドスケープへのアプローチは、特定の音を個人がどのように受け取るかに重点を置き行われる。空間分野からのアプローチでは、より魅力的な空間をつくるため、地域性、文化性を重視した音風景整備を行っていくことが重要である。

□ 研究方法と位置づけ



自動車の音

「ゴー」という車の音
会津若松市　七日町通り

自然の音

「ジャブジャブ」「サラサラ」という水路の音
「リンリン」「リリリリ」という虫の音
会津若松市　水田が広がる

記憶に残る音

「パチパチ」と薪が燃える音や職人の声
美里町本郷　本郷焼きのぼり窯の火入れ

笛と太鼓によるお囃子の音と舞を舞う音
会津若松市　会津三匹獅子

子供達のかけ声とほら貝の音
美里町高田　虫送り

「オーンサーンヤレカケロ」というかけ声
南会津町田島祇園祭

□ 日本人独特の音感覚（文献調査）

我々日本人は、音の風景を重要な要素として捉えてきた伝統があるといえる。それは多くの西洋人にも驚かれてきた日本人独特の感覚である。外部と内部に厳密な境界を持たず、外で発生した音がそのまま聴くことの出来る日本建築の特徴や、中国から伝わり独自の発展を遂げた茶道、昔から行われてきた俳句など、様々なところにその感覚を見ることが出来る。また、日本人には虫の音を愛でるという独特な感性があり、江戸時代には虫聴きの会や、コオロギ・スズムシを売る虫売りがいた。しかし、外国人はそれら虫の音を雑音として聞き取る。楽器の音を比較したときも日本の楽器の音は西洋と違い、雑音の領域を奏でているという特徴がある。雑音の領域とはつまり自然の音に近いということを表している。四季の豊かな日本の人々は周りの自然と深く関わり、より繊細に感じ、そのなかの様々な音によって生活を豊かに彩ってきたのである。

□ ヒアリング調査

「汽笛の音が憧憬として強く残っているが、今の観光用の汽笛の音は商業的でわざとらしさを感じる。」「昔は子供たちの遊び場だったところが、どんどん有料駐車場になっていってしまう。子供たちのにぎわいが聞こえなくなってしまったことが寂しい。」といった記憶と繋がった音の話を聞くことが出来た。これらの話から、人々の声などでにぎわっていたかつての会津を伺うことが出来た。またこのような音は、もう無くなってしまった音でもあり、それをその当時実際に体験した人の話として保存することが出来た。その他にも「現代の卓上型人間は実際に行くということをしなくなったので、音の無い音、つまり気配の音を感じることが出来なくなってしまった。昔の人はそれを自然との共存の中で身につけていた。木は言葉を発しない。しかし人々は木に語りかけ、それから音の無い音を感じ取っていたのである。普段人が踏み入らない奥会津の森に行くと、気配の音に敏感になる。」というような、貴重な話を聞くことが出来た。

□ 会津のサウンドスケープ構成音（ヒアリング調査・アンケート調査・音の収集調査結果）

1. ケの音ー「自動車の音」・「自然の音」・「記憶の音」ー

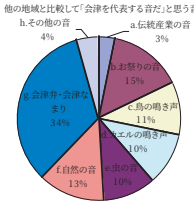
グリット調査とアンケート調査で裏付けられた会津のサウンドスケープ構成音は、自動車などの「交通機関の音」と、虫の音や鳥の声、木々のざわめきなどの「自然の音」である。グリット調査においてこの2つの音を合計すると、聞こえてきた音の約8割を占めた。また、これらの音はアンケート調査においても会津で生活する人にもよく聞くと認識されていることが分かり、裏付けをとることが出来た。アンケート調査から「自動車の音の特徴」としては、「騒音であると感じる人が多く」、また「普段の生活では気にしなくなっている音である」、ということがあげられる。「自然の音の特徴」としては、「昔よりも少なくなっていると感じる人が多く」、「意識して聴かれる音である」、ということがあげられる。この2つの音以外に、人々の記憶に残る音も重要な音の要素であるといえる。

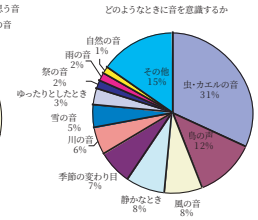
聴覚は、それが鮮明な記憶に直結するという特徴を持っている。今回のアンケート調査やヒアリング調査でもこんな音が心に残っているといった話を多く聞くことが出来た。会津で生活する人の記憶に残る音は、豊かな自然の音や昔の行商の声、祭事のお囃子の音（ハレの音）などの人々の賑わいなどが多かった。子供の頃に聞いたSLの音やお寺の鐘の音などもあった。3地域で調査を行った会津御詠歌も、その地域の人々の記憶に深く根付いていた。また、実際聞くことはないが、経験などから感じ取る気配の音（雪の音など）もこの中に入ると考えられる。

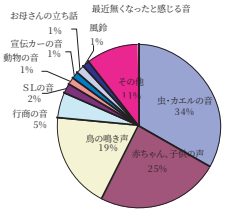
これら記憶に残る音について語るとき、殆どの方がいきいきしながら話すということも、とても印象的であった。しかし、最近の会津では商業化が重視されたため、自然の音と賑わいの音は聞こえなくなり会津らしさが消えてきている、という意見も聞くことが出来た。アンケート調査では、42%の方が「無くなったと感じる音がある」と答えている。文化や地域と深く関わり、本当の会津を気づかせてくれる記憶の音は、これからの会津をより魅力的にするためにも重要な音の要素であると言える。

2. ハレの音ー「記憶の音」ー

アンケート調査において「会津を代表する音」と質問したところ、「会津弁」、「自然の音」の次に多かった回答が「お祭りの音」であった。先にも記したように、祭りの音は記憶に残る音であると言える。会津地域では今でも多くの伝統行事が受け継がれ、その形式も非常に独特であった。一方で、スピーカーの利用や行事の商業化などで、その音風景が変わってきていることも確認された。







□ 分析・問題提起

会津のサウンドスケープを構成する要素は「自動車の音」、「自然の音」、「記憶の音」である。この中でも「自然の音」を含む「記憶の音」は、人々が会津という地域で体験した音である。会津の伝統の中で受け継がれてきた、または会津の人々の感性によって感じられたそれらの音は、体験していない私にもとてもいきいきと伝わってきてた。会津地方は都市に比べ記憶に残る音がまだまだ残っている地域である。しかしその音がしばしば自動車の音など人工的な音にかき消されていることが、今の会津の現状である。会津のサウンドスケープを構成するための魅力的な空間提案においては、道路を再配置し、会津の人々の記憶に残っている音を丁寧に拾い上げ、配置していくことが重要であるといえる。

□ 空間提案

場所：会津若松市の大町通り

問題点：大町通りは駅から1.3km続く通りである。かつては主要な通りとして賑わっていたが、現在は空き店舗が目立つ。また、通りは道幅の割に車両の往来が激しく、騒音値が60dB後半～70dB前半と高くなっている。また歩道が狭く、途中で分断されているため人が歩くにも不便である。駅に面した通りとなっており、観光客がここを通り他の観光地を巡ることも考えられる。かつてのにぎわいが戻れば、会津の顔ともなる通りである。

融通寺の鐘

提案内容：車両の制限・音の配置などで魅力的な空間を創出

〔車両の規制〕
車両は表通りである中央通りを主道路とし、走行を促す。大町通りでの車両の走行は商店関係のものとハイカラさんに制限する。これにより、他の会津特有の豊かな音風景が自動車による騒音によってかき消されることを防ぐ。

〔道路の整備〕
現在野口英世青春通りのみで行われている煉瓦敷きによる道路の整備を通り全体で行い、景観とともに歩く音を整備する。

〔音の要素をを配置〕
会津の人々の記憶に残る音を中心にまちなみに配置し、魅力的な空間作りを行う。具体的音の要素：お寺の鐘の音（融通寺）・会津漆器ろくろ引きの音・金物屋の作業音・水路の音・雪の音・木々のざわめき・季節ごとに聞こえる虫の音・季節ごとに鳴く鳥の声・下駄の音・馬のひずめの音・その他店の作業音や商売の声などを通りに配置、整備しにぎわいを作り出す

〔人々のにぎわいが聞こえる広場作り〕
空きスペースを利用して人々が集え、にぎわいが生まれるスペースを作り出す。また、この大町通りはかつては旅館の通りでもあり、そこでにぎわいがつくられていた。現在それらは旅館として活用されていないが、その風情のある建物もにぎわいのスペースとして活用する。

〔会津の音を流す〕
ハレの調査などで録音した会津の音を既存の屋外スピーカーで流す。現在はクラッシックなどが流れているが、会津特有の音を流し、その通りを歩く人にとって魅力的な空間をつくりだす。